

〔八丈島における遺伝資源の収集，評価，保存，増殖〕

特産野菜類のセル苗利用による移植栽培適性

～アシタバの栽植密度およびオクラの定植ステージ～

野口 貴

(島しょ農林水産総合センター八丈事業所)

【要 約】特産野菜類のセル苗による移植栽培適性を検討した。アシタバでは，1穴あたりの苗数増加や栽植密度の低下に伴い生産性が低下する。オクラでは，定植ステージが進むにつれて収量が減少するため，子葉半展開期での定植が妥当である。

【目 的】

八丈島特産のアシタバやオクラは，いわゆる直根性の性質を持ち，直播栽培されるのが一般的である。島内では，これらのセル苗利用が試みられているが，その栽培方法は未だ確立していない。そこで，特産野菜のセル苗利用による移植栽培適性を明らかにするため，アシタバの栽植密度およびオクラの定植ステージの影響を検討する。

【方 法】

試験1) アシタバの栽植密度：2004年12月4日にアシタバの種子を128穴セルトレイにセル1穴あたり7粒ずつ播種し，発芽後，1，2および4本に間引いた(図1)。本葉が2枚展開した05年2月17日に圃場へ定植した。栽植距離は，栽植密度が50，33または20株/m²になるよう，セルあたりの苗数を考慮して条間を20～50cm，株間を10～40cmの範囲で設定した。05年11月中旬に，株立率，株重，抽苔率を調査した。

試験2) オクラの定植ステージ：05年5月25日に‘エメラルド’，6月9日に‘アーリーファイブ’をそれぞれ圃場(直播)，200穴セルトレイ(固形培土)および9cmピニールポットへ播種した。直播は1穴3粒とし，本葉展開後1本に間引いた。セル苗の定植ステージは，：子葉半展開期，：子葉展開期，：第1本葉展開～第2本葉抽出期とした(図4)。ポット苗は第3本葉期に定植した。栽植距離は，条間80cm×株間40cm，施肥量は窒素，リン酸，カリを成分量でそれぞれ，1.8，2.2，1.8kg/aとした。

【成果の概要】

- 1) アシタバの株立率は，栽植密度が同じ場合，セルあたりの苗数が多くなるに従い減少した(図2)。一方，セルあたりの苗数が1または2本の場合，栽植密度による差はわずかであったが，苗数4本の場合には，粗植になるほど高まった。抽苔は，33および20株/m²かつ1穴2および4本の区で発生した。
- 2) アシタバの1株重は，粗植の20株/m²の場合に高くなったが，セルあたりの苗数との関係については判然としなかった。圃場あたりの地上部重は，密植の50株/m²かつ1本苗の区で高くなった(図3)。
- 3) オクラの草丈および収穫果数は両品種とも，直播で最も高く，セル苗利用では，定植ステージが進むにつれて低下する傾向となった(図5，6)。
- 4) オクラの根系は，定植ステージが進むにつれて，根巻きによる発達障害が認められた(図7)。移植栽培のうち，第1次根が正常に発達したのは，定植ステージであった。
- 5) 以上，直根性野菜の移植適性はセル苗の定植方法に左右されるので，さらに検討する。

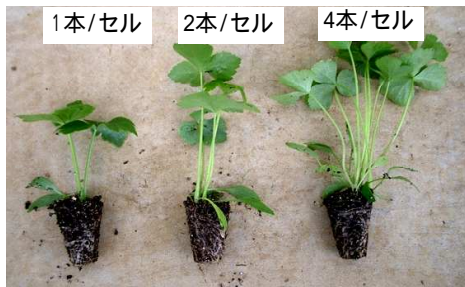


図1 アシタバの定植苗

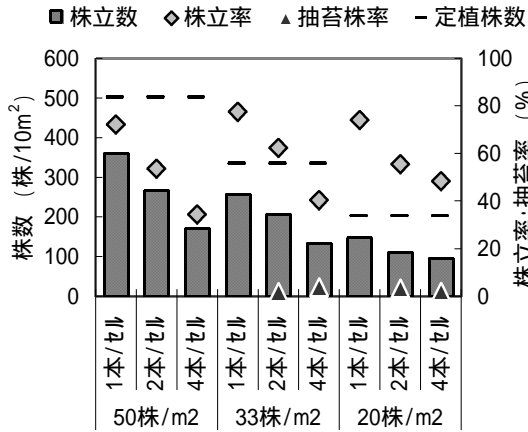


図2 アシタバセル苗の栽植方法と株立数
2月17日定植・11月18日調査

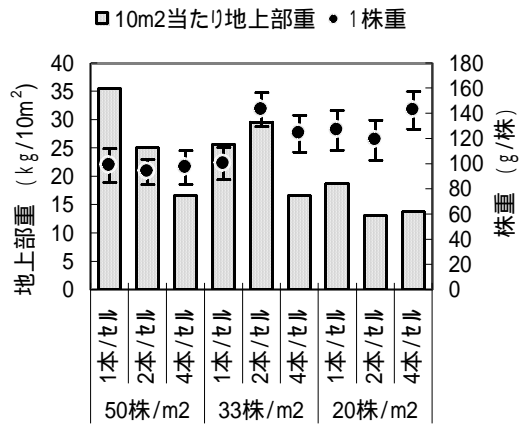


図3 アシタバセル苗の栽植方法が株重・地上部重に及ぼす影響
株重はM ± SE(n=20)を表す



図4 オクラセル苗の定植ステージ

○: 子葉半展開期(播種後5日), ○: 子葉展開期(同12日),
○: 第1本葉展開～第2本葉抽出期(同20日)
なおポット苗(本葉3枚展開, 同26日)は省略

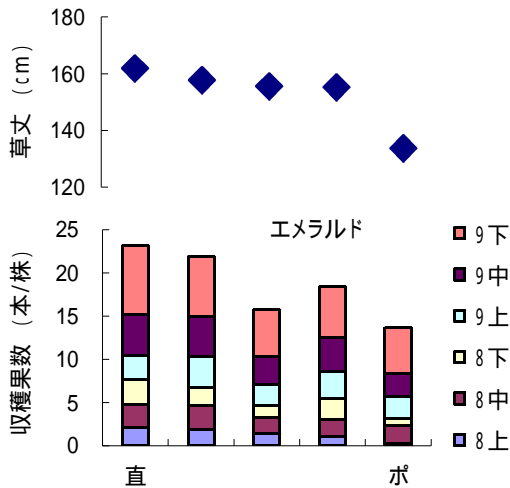


図5 'エメラルド'の定植ステージと草丈・収穫果数
直) 直播, () ~ () セル苗(図4), ポ) ポット苗(第3本葉展開後)

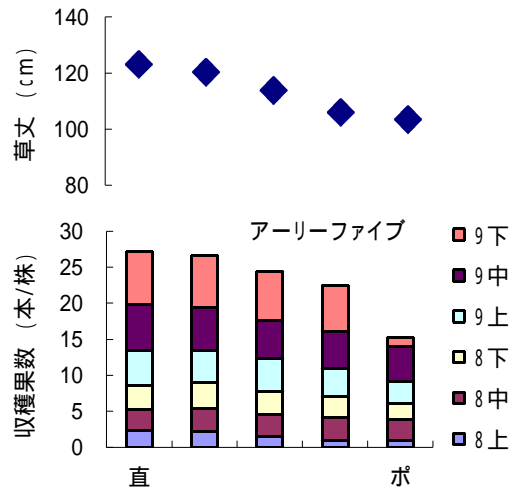


図6 'アーリーファイブ'の定植ステージと草丈・収穫果数



図7 オクラの定植ステージが根系の発達に及ぼす影響 (記号は図5を参照)